

# 迷走台風 長寿の秘密は

## いろはつづり

台風5号は、7月21日小笠原諸島近海で発生、8月9日に日本海に抜けて温帯低気圧になった。のべ19日間にわたって迷走し、長寿台風として歴代3位の記録だ。

台風は、川に浮かぶ渦の動きに例えられる。日本の南方洋上に横たわる北太平洋高気圧の周りを吹く風が、川にあたる。発生すれば、梅雨を描くように日本周辺にやって来る。寿命も1週間程度で迷走することはない。今回のように高気圧が台風の前面にあるなど通常と異なる気圧配置だと、台風は迷走し、予報も難しくなる。

そんな時、イベントの関係者などから問い合わせが気象庁の天気

古川 武彦 元気象庁予報課長

相談所に殺到し、時おりクレームもある。「予報課長を出せ、予報が外れて大損をした」。腹の虫が収まらないという人の電話が回されて来る。ひたすら電話口で頭を下げたこともあった。

長寿には秘密がある。台風は水蒸気が凝結して雲粒になるときに放出する、莫大な熱エネルギーで維持されている。水蒸気は台風というエンジンを動かす天然のガソリン。今年は日本周辺の海水温が平年に比べて暖かく水蒸気はたっぷり。それが長寿につながった。

他方、スパコンで行われている台風モデルを支えるのは正確な観測データ。中でも台風の近傍は重要だ。

筆者は新米の頃、本州最南端の潮岬測候所（和歌山県）でラジオゾンデ観測に従事した。ゴム気球に水素ガスを詰め、上空約3000mで風や温度などを測った。その日は、台風の接近で風が強く放球が危ぶまれた。強風で大きく揺れる気球を放した瞬間、地面をほうように流れたかと思うと、一瞬でグイッと上空に持ち上げられ、雲の中に吸い込まれていった。今も記憶が鮮明だ。台風5号は潮岬の近傍に上陸した。今回の観測はうまく行ったのだろうか。

### 執筆者紹介



1940年生まれ。滋賀県出身、鹿嶋市在住、理学博士。61年に気象庁研修所高等部（現・気象大学校）卒業。予報課長、札幌管区気象台長など歴任。退官後の2003年に気象研究や啓発に取り組み活動の舞台「気象コンパス」を立ち上げた。